

---

# けいおん！ Love The Way You Music

秋秋刀魚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん！ Love The Way You Music

### 【Nコード】

N7684X

### 【作者名】

秋秋刀魚

### 【あらすじ】

けいおん！の共学恋愛物です。オリ主は日本語ペラペラの外国人です。ヒロインは漣です。

感想、意見頂けたらありがたいです。

一部マニアックな可能性有り。とにかく自己満作品！最後まで！突っ走ります！お付き合いください！どうぞっ！

## 1 転校生は…？（前書き）

前投稿していた

けいおん！〜甘い人生〜

が脱線に脱線を重ね挫折、誠に勝手ながら削除させていただきました。

今回は完璧自己満作品です。お付き合い頂けたら幸いです。

（・・・）

## 1 転校生は…？

私立桜ヶ丘高等学校

地域過疎化、少子高齢化の影響で3年前より男女共学となった元女子校。

古きよき風情のある校舎

充実した設備

多彩な部活動

桜高パンフレットより抜粋

そこに通う1年生達は最初の間テスト終了後2週間、新たな仲間が加わるという報を聞いた。

そう、転校生である。

転校生と聞いた時、誰もがこんな中途半端な時期に？と思った事だろう。

だが生徒達は現金なもので転校生が現れる前日になるとどんな人がどこから来るかなんて話題で学校内はもちきり。

田井中律（15）率いる軽音楽部の部室でもその話題は上げられていた。

「いよいよ明日だなー、転校生っ！」

カチューシャを装着した女子、田井中律がテンション上げ気味に言った。ちなみに彼女のパートはドラムであり部長でもある。

「りっちゃんと澪ちゃんのクラスに来るんでしょう？先生何か言っただけなかつた？」

そう言っただけで紅茶を啜った茶髪のショートボブヘアの女子はギター担当の平沢唯だ。

「男の人って言うてたよ。なんでも海外から来るとかなんとか」

黒髪ロングの女子、秋山澪は答えた。彼女はベース担当だ。

「それって！帰国子女って奴ですかい！？」

何故か興奮する唯。

「楽しみね」

そう言った金に近いベージュ色の長髪を持つ彼女は琴吹紬、彼女はキーボードの担当であり紅茶の供給者でもある。

「部員獲得のチャンスだな」  
律が不適に笑った。

彼女たち4人が今年桜高で結成されたバンド、桜高軽音楽部である。因みに部員は彼女たちのみでマトモな演奏は未だに未経験、少し練

習して細の持参したティーセットで紅茶を嗜みながら談笑するとい  
うイギリスの婦人的過ごし方で時間を潰して帰っている。  
しかしやる気が無いわけでは無く、おしゃべりに熱が入ってしまった  
ているようだ。

いよいよ転校生到来の日

誰もが胸を躍らせながら登校した。

早めに到着した律はクラスメイト達とどんな転校生かという予想を  
立て、澪は本を読み冷静を装っていたが内心ワクワクしていた。

「席付け」

やる気の無い担任の声が響き

そして

朝のホームルームが開始された。

「来なさい」

担任教師の招きで転校生の姿が露わになる。誰もが待ち望んだ瞬間  
である。全員が食い入るように転校生を見た。

「……………」

教卓の前に立った転校生の姿を見て誰もが己の目を疑ったことだろう。澪は何度も目をこすり律は目を見開いたり細めたりしたが転校生の姿が変化する事はなかった。

しかし信じられない。

色白の肌。

高い鼻。

彫りの深い顔。

ダークグレーの髪と目。

帰国子女どころの騒ぎではなかった。

「ジェイムズ・ライリー」

完全な白人だった。

「よろしく」

日本語の発音は完璧。

## 2 先ずは入部（前書き）

前回までのあらすじ

転校生は外国人でした。



## 2 先ずは入部

俺はジェイムズ・ライリー。

呼び名？

故郷じゃ大抵の奴らは俺の事をジェイムズの愛称のジムって呼んだ。まあ好きに呼んでくれ。

出身地はミシガンのデトロイト。

そう……。暴力と犯罪の溢れるアメリカ最悪の犯罪都市、クソみたいな場所だった。

叔母さんは一昨年ギャング共にレイプされた挙げ句銃殺され廃車のトラックに詰められた。とにかく最悪、昨年まで1人で出歩くのさえ禁止されてた。

でも誇れる事もあった。

それは音楽だ。

デトロイトは多くのミュージシャンを育てた場所でもある。

有名どころはマドンナ、エミネム、そんなところかな。特に後者はドープ（最高の意）だ。まあとにかく俺も彼らに影響されて音楽を好んだ。よく友達とチーム組んでクラブで開催されるフリースタイルのラップバトルに参加した事もあった。

制限時間内にスクラッチミュージックに合わせ、いかに相手をライム（韻を踏む事）しながらディス（罵るか）るかの勝負だ。勝敗は観客が決めるシステムになっている。

話がそれた。

戻そう。

俺が日本に来る事になった理由は父親の仕事だ。

『ジム、来年から日本に住むわよ』

『すまないなジム。日本支社に配属になってな、だが隣りの夫婦喧嘩に悩まされる心配はもうないぞ。ハッハッハッハッ』

そう両親に聴かされたのが去年末。父親はある自動車会社の営業部門に勤めていて日本支社に転勤する事になり、もれなく家族もセツトで支社のある桜ヶ丘に引っ越した。だからこの私立桜ヶ丘高等学校に転校したわけだ。

幸いな事に俺は日本語が話せる。

え？ご都合主義？

違う違う。母方の祖母が日本人でそれが影響してる。父親も仕事の都合上日本語をある程度話せたと俺も日本のアニメが好きで気付いたら話せるようになった。

本当さ。信じてくれ。それがご都合主義って指摘はするな。

因みに両親は2人ともハーフだ。母は日系人アメリカ人、父はドイツ

ツ系アメリカ人だ。となると俺は何系？まあなんでもいいか。本来なら4月から普通に入学するつもりだったんだが引越しの時にグダついたり移住の手続きで手間取り6月からの入校になった。

今は教室の窓際の最後列で授業を受けている。やっぱりここが転校生の指定席だよな。過ごしやすい。

でも転校生はしばらくはブランド品扱いというのは世界共通らしく、休み時間の度にクラスメートに囲まれ質問責めにされた。

Q 趣味はなんですか？

A 音楽鑑賞

Q 部活は何に入るの？

A まだ決めてない。

Q 彼女は？

A いません。

Q やらないか

A 消え失せる

と適当に返しているうちに授業が始まる。

昼休みに昼食を食べようとジップロックからサンドイッチを取り出せばすぐに質問責め。メディアみたいな奴らだ。ゆっくりランチもできない。

まあどいつもこいつも俺が”外国人”だから珍しいんだろ。深く関わろうとするような話はしてこない。ようするにジエイムズ・ライリーという人間には興味が無く、”外国人の転校生”に興味があるのだろう。

なんて考えてると……。

「ねえねえ！よかったら放課後軽音部に見学に来ない？」

いきなり深入りして来る質問者がいたよ。

「ケーオン部？」

なんだそれ。

「軽音楽部、バンドとかするクラブだよ」

バンドか、でも俺楽器出来ないんだよな。

「大丈夫！大丈夫！私はその部長でドラムの田井中律！」

何の根拠もない”大丈夫！”を連発し自己紹介を始めたこのヘアバンドは元気に満ち溢れてる。

「こっちはベースの秋山漣」

黒髪がお辞儀する。大人しそうな印象だ。俺がイメージする日本人が具現化したみたいな奴だ。

Oh……Asianbeauty……。

「で？来てくれる？」

「Okay・放課後だな」

他に入りたい部活もないので承諾すると2人は嬉しそうに自分の席に帰っていった。

放課後

「えーと、ジェイムズ君……？でいいの……かな……？」  
来たのは漣だった。

「ジム、ジェイミー、ジェイムズ、なんでも呼んでくれ」

当たり前だがアメリカで君付けなんかされた事ない。ジムかステー  
ジネーム（ラップバトルでの芸名）で呼ばれた。君付けも悪くな  
いな。因みにジム、ジェイミーはジェイムズの愛称だ。本来なら親  
しくなっってから使うのが普通なのだが俺はそんな回りくどくはない。

「じゃ、じゃあ……ジ……ム？」

……。なんだ。この感じ

は……。ジ……ム……ジ……ム……ジ……ム……。

「ジ……ジム？」

「っ！なんだ？」

危ない危ない……。何かに酔ってた。

「律、掃除当番だから。先部室行ってるってさ。来て」

「了解」

正直楽しみだった。軽音楽部とやらが。

「そこ。制服を着なさい」

教室を出た瞬間召還された教師に捕まってしまった。改めて自分の服装をCheck。黒い薄手のパーカーに白のTシャツ、そして制服のズボン。どうやら日本の学校じゃマズい格好のようだ。授業中は何も言われなかったんだが。教室に戻り教師が過ぎ去るのを待ってから俺達は移動を始めた。

先ほど校内を回って思った事だけど、ここには不良やヤンキー、ジヤパニーズギャングがいるようだ。彼らは着崩したりしてるが規定の制服を着用している。やはり日本のギャングは礼儀作法を重んじるのか。

「違うと思う」

湊の説明によると奴らは悪ぶってるだけのいい子ちゃんらしい。なんだつまらん。

「ここが軽音楽部の部室だ」

連れてこられたのは最上階にある音楽準備室だ。澁が促すので扉に手をかけ、開けた。

「よっこそ軽音部へ！」

「さぶらーいずー！」

「歓迎するぜいー！」

「ッ！？」

サプライズパーティー状態だ。律までいる。

「一名様ごあんなあーい！」

「ごあんなあーい！」

律と茶髪のシヨートボブヘアにたちまち奥まで押されていき席に座らせられた。

「Tea or Coffee？」

「Coffee。」

金髪の女子（俺の予想じゃハーフ）にふざけ半分で注文した。部屋にティーセットが完備されてるワケ……。 「どうぞ召し上がって」 あった……。

「Oh……」

カフェかここは。

「イタダキマス」

驚きのあまり口が回らなかつたがコーヒーカップに口つけた。

Good . いい味だ。

コーヒーを泥水呼ばわりする某狐部隊の少佐の味覚が信じられんよ。

「お菓子もどうぞ」

本気でカフェなんじゃないか？この金髪女子はウエイトレスに向いてるな。なんて思いながらクッキーを口に入れる。これまたGood。  
d。

「じゃあ部員を紹介するね。こっちの茶髪のシヨートが平沢唯、ウチのギター」

「よろしくね！唯って呼んでね！」なんかフワフワした感じた。

「こっちが琴吹紬、通称ムギ。キーボード担当でいつもお菓子持っ

て来てくれるんだ」

「よろしく願います」

おっとり系のお嬢様のような。

「で、例の転校生で見学者のジエイムズ・ライリー」

「よろしく。ジムだ」

手を差し出し2人と握手を交わす。

「よろしくね。ジム君」

「よろしく願います」

「自己紹介も終わった事だし、演奏聴いてもらうか！」

なるほど。餌（コーヒー、お菓子、演奏）で俺を釣り上げ入部させようって魂胆か。ところがどっこい（死語）。俺は性格がひねくれていて、入ってくれて言われると入りたくなくなる。ほら、STAFF ONLYの扉の向こうが気になるのと同じく事さ。なんて考えてるウチに準備は整ったらしく、彼女達はアイコンタクトで準備完了の合図を律に送っている。

律は頭上にスティックを掲げカウントに合わせ打ち合わせた。

「ワンツースリーフォー」

演奏が始まった。

この曲は聴いた事がある。

”Wing to Fly”だ。小太りの眉毛が濃い某女性歌手が歌っていた。日本語名は確か”翼を下さい”。日本の有名な楽曲で数々のアーティストがカバーしている。約2分、上手いとは言えないが迫力というか雰囲気は凄い。

「どっ？どっ？」

律と唯が感想を求めてくる。

「上手いと言いはないな……」

「さすがアメリカ人……はっきり言っな」

律の苦笑いに釣られ薄笑いを浮かべてしまふ。

「ちよつと待て」

担任から貰っていた入部届にサインし律に渡した。

「入部してくれるの!？」

あんな演奏聴かされたら入部するしかないだろ？

帰宅後

「とりあえず!軽音楽部つてところに入ってみました!」

入部も決まりテンションMAXの俺は帰ってすぐに父さんに日本語で宣言した。

「K・ONGAKUBU?なんだそれは？」

父さんはネクタイを緩めながら英語でそう聴いたので。

「バンドだよ」

そう英語で返してやる。もちろん自宅では英語が標準言語だ。

「お兄ちゃんバンドやるの？」

妹のキンバリーだ。歳は6歳、家族はキムって呼んでる。因みに某将軍様とはいっさい関係ない。

俺はキムを抱き上げた。

「そうだよキム。ギターとかベースでね」

「SATSUGAIするの？」

「……」

俺の影響か?俺が悪いのか?

「SATUSGAIもしないし変なメイクもしないさ。さあ晩ご飯はなんだろうな?」

キムを抱きかかえてキッチンに向かう。途中愛犬のサム(ゴールデ



ンレトリバー」に餌をやる。キッチンでは母さんが夕飯の準備を始めている。

「さあキム、ママにメニューをきいて？」

「晩ご飯はなに？」

「今日はカラアゲよ」

カラアゲ？

「日本のフライドチキンよ。隣の山田さんに作り方教わったの」

冷蔵庫には作り方が記載された紙が貼られていた。裏面がダイエツト食品のチラシだった事は黙っておこう。因みに山田さんとは隣に住む30代の独身女性、正直デブだ。陰のあだ名はFat-Bea r（太ったくまさん）。

「そういや母さん。俺学校のクラブでバンドやる事になったから」

「ラップの次はバンド？いいわね。母さんも昔やってたわ。メンバ

ーは？」

「俺含めて5人、全員女子」

「あらあら」

「ジムー。来てみる」

シャワー後、父さんに呼ばれ何事かと行ってみれば。

「若い頃使ってた奴なんだが……。もう弾くこともないだろうからお前にやろう」

父さんから渡された物、それは漆黒のエレキベースだった。しかもレフティモデル。そう、俺と父さんは左利きだ。

「アンプ、シールド（アンプと楽器を繋ぐケーブル）はないが、どうだ？」

正直楽器の知識に乏しい俺だがいいベースだと言う事だけはわかる。こんなもの突っ返すわけがない。

「父さん、ありがとう」

「ああ、すっかりやれよ」

俺の肩を叩き父さんはシャワールームに向かった。それを見届け俺は自室に戻る。改めてベースを見つめる。

「……………」

ジムはベースをてにいれた！

やるきが10あがった！

テンションが80あがった！

RPG風ならこんな感じか。

それからムチャクチャにデタラメに、とにかく弾きまくった。様々なバンドのベイスリストと自分を照らし合わせ、イメージして弾きまくった。鈍い音が響く。ハタから見たらただの馬鹿だろう。でも……………

すげえ楽しい。

「お兄ちゃんうるさい」

「すいません」

## 2 先ずは入部（後書き）

感想、意見お待ちしております。

**番外編：登場人物（前書き）**

随時更新予定です

ネタバレ要素を含む可能性があります

## 番外編：登場人物

名前：ジエイムズ・ライリー

身長：170cm

イメージCV：加瀬康之

NARUTO/カンクロウ

FAILY TAIL/シモン

パート：ベース（見習い）

この物語の主要役、基本ドイツの一人称で物語は進む。日系アメリカ人の母とドイツ系アメリカ人の父を持つ。兄弟は6歳の妹が1人。ペットはゴールデンレトリバーが1匹。

外見：痩せ形の白人青年、ダークグレーの瞳を持つ。髪色は黒でほぼ坊主。左利き。

内面：薄情だが気に入った人物には対してはぶつきらぼうではあるが優しく信頼する。その信頼は忠誠に近い。妹の面倒を見ている所為か面倒見がよい。キレるとヤバい。F\*k連発。

服装：規定の制服を着用してるが着崩し、帰宅時と部活時は暑い時はTシャツと制服のズボン、寒い時はTシャツとパーカーを着用している。ワイシャツの下に必ずTシャツを着ている。私服は不明。

嗜好：音楽に関しては雑食、なんでも聴くが特に昔から嗜んでたヒップホップを好みラップをやっていた事がある。若干オタク

平沢唯

CV：豊崎愛生

けいおん！本来の主役その1、ピンでとめた茶髪のショートボブヘアの女子。ふわふわしたイメージが強く天然のドジッ子。ギターとボーカル担当で愛用のギターをギー太と名付け溺愛している。

秋山澪

CV：日笠陽子

けいおん！本来の主役その2、黒髪ロングの女子。姉御口調でルックスは軽音部一だが極度のビビリ体質で怖い&痛い話が苦手な上恥ずかしがり屋。ベースとボーカルを担当。左利き。

田井中律

CV：佐藤聡美

けいおん！本来の主役その3、茶髪をカチューシャで止めた女子。元気の塊で明るい軽音楽部の部長。澪同様に姉御口調、繊細な作業が嫌いらしくそれを理由にドラムを担当している。

琴吹紬

CV：寿美奈子

けいおん！本来の主役その4、金髪のようなベージュロングの女子。おっとりしたお嬢様で軽音楽部に出るお茶とお菓子の供給者。少々ズレた価値観を持つ。キーボード担当。

**番外編：登場人物（後書き）**

感想、意見

お待ちしております

### 3 P u k e ! P u k e ! (前書き)

注意！今回汚い表現含みます



### 3 P u k e ! P u k e !

ベースを手に入れた俺は翌日軽音部でドヤ顔をかましベースを見せ付けた。

「ベースかあ〜」

「漣ちゃんと一緒ね」

「もしかして左利きななの？」

「ああ」

漣の質問に答えベースを置き席に戻る。

「じゃあ漣ちゃんが男の子になったらこんな感じだね！」

唯、それは安易すぎる考えだ。

「そつかあ〜。左利きか〜……。左利きね〜……。左利きってなんか変な感じだな！私が言うのも何だけど！！」

何故か嬉しそうに律を揺さぶる漣。どうしたんだ？

「仲間ができて嬉しいのはわかったからちよつと黙ってて」

ああ、なるほど。左利きって珍しいもんな。

「いくらぐらいしたの？」

「父さんのおさがりだからタダだった」

いいな〜。と指をくわえる唯にわざとドヤ顔をかます。

「コーヒーできましたよ」

「Thank」

紬のコーヒーは美味い。今まで飲んできたものの中でも1位2位を争う。

「練習はしたの？」  
と律。

「ベースって何練習すればいいかわからなくてな。貰ったのベースだけだから教本とか説明書も無くて」

そう言うと漣がなにやら鞆から取り出した。

「じゃあこのコード表使つて。私は別の持つてるから」

「ありがとう。感謝す……」

”猿にもわかるベースギター”

「……」

バカにされてる気がする。だがここは指摘する所ではない。

「そうそう！ジム。明日英語の読みのテストがあるじゃん？コツかなんかない？」

「私も私も！」

「ないな。」おはようございます。今日はいいい天気ですね”を覚えるコツは？って聴かれてるようなもんだ」

「うう……。確かに……」

少し冷たかったか。期末テストで英語教えてやるか……。

### 軽音部に入部してから一週間目の夜

父さんがお土産としていろいろと甘い物を買って来たわけなんだが、量が尋常じゃないし味も以上に甘い。合成着色料、化学調味料MAXだよ。コレ。もちろんカロリーOFFなワケがない。

そこで珍しくランニングをしてるわけなんだが……。

「U g e e……」

見事胃の中身がShake! Shake! されてしまい気持ち悪くなってしまいました。胃酸の酸っぱさが口の中に広がり気持ち悪さが増す。やはりあんなに甘い物食うんじゃないかったチクショウ。

「U g e e……」

戻しそうだ……。大惨事になる前にトイレか茂みに吐いちまおう。  
ナイスな事にコンビ二発見。俺ついてるう！神よ。感謝します。以  
前聖書に落書きした事を懺悔します。急いで店内に入り雑誌コーナ  
ーを進むと。窓ガラスからある人物の姿が見えた。

「Y u i……?」

あいつプライベートじゃポニーテールなのか？てかこんな夜中のコ  
ンビニに女子1人ってのはマズいんじゃないか？入口付近にはコン  
ビニ夜のお供チンピラA B C D。絡まれたら俺でも助けられないぞ。  
絡むなよチンピラ。絡むな。早くトイレトイレ……。

「君いくつうー?」

F \* \* k i n g Y o b (この糞チンピラアアア)！！

「ちよつと付き合ってよ」

「え……。いや……。ちよつと」

「ちよつとなに?」

朦朧としそうな意識の中、絡まれた唯を救うべく吐きたい衝動を抑  
え入口に戻りチンピラに声をかける。この野郎ぶつ殺してゲロまみ  
れにしてくれよう。

「Hey! Hey……! u……」

ヤヴァい……。ぎもぢワルい……

「なんだ?」

「u……y……やめ……」

も……。もう限界か……。も……。どうやら解き放つ時が来たようだ。

I t ' s S h o w T i m e ! !

「O E e e e e ! ! !」

「ギヤアアアアアア!」

「# % & \* @ \$」

「きたねえええ!!」

「@ F ! ? \ #」

「どんだけ吐くんだコイツ！」

「ウビヤアアアアア」

「もらいゲロすんなっ！」

「なんなんだよチクシヨウ！」

ゲロ  
Pukeまみれのチンピラが逃げていく。スツキリ！ざまあWW  
案内役に立つもんだな。ゲロ。

「オエツ……ゲホツゲホツ！……ペッ！ペッ！」

唾を何度か吐く。店員ゴメンナサイ。

「あの……？大丈夫ですか？」

唯……逃げなかつたのか？てか。

「なんで敬語？俺だよ」

「え？失礼ですが……どちら様で？」

え？もしかして人違い？

「あ……もしかしてジムさん？」

「？ああ」

「私、平沢唯の妹の平沢憂です。姉がお世話になってます」

え？妹？え？双子？

「はい。姉とは1つ違いなんです」

「Oh……似てるな」

「はい。よく言われます」

似すぎだろ。姉と違ってしっかりしてそうだな。しかし。

「こんな夜中に女子1人でコンビニなんて危ないぞ？」

デトロイトなら高確率でレイプだ。もしくは誘拐。ここは日本だが安全とは言えない。

「明日の朝食のパンと飲み物を切らしてしまっ……」

なら仕方ないな。朝飯ないと結構キツイ。

「じゃあ私はこれで」

「送ってやるよ」

夜道をレディ1人で帰らせるなんて紳士な俺には出来ないね。

「え？でも……」

「いいっていいって、どうせ暇だしな」

「じゃ、じゃあお願いします」

憂がコンビニに入ったのでしばらく唾を吐きながら待つ。

「よかつたらどうぞ」

買った物を済ませた憂から差し出されたのはミネラルウォーター。

「吐いた後じゃ気持ち悪いでしょうから」

なんて気遣いの出来る子なんだ。

「ありがとう」

キャップを外し彼女の優しさを噛み締めながら口を濯ぎ吐き出し。

それから飲む。ああ美味い。

「こつちです」

暗いな……。……。

「あの、ジムさんは軽音部で何を担当してるんですか？」

「ベースだよ。まだなかなか上手く弾けないんだけど」

「頑張って下さいね。ところで軽音部でお姉ちゃんどうですか？」

「um……。まあ毎日菓子くって茶飲んで……。まあみんなと変わ

らずダラダラ過ごしてるかな」

「楽しそうですか？」

「ああ」

「よかつた〜」

とまあ、適当な会話をしているうちに平沢家到着。

「本当にありがとうございました。気をつけて帰って下さいね」

「いいんだ。じゃあな」

「さようなら」

終始人を嫌な気持ちにさせないいい子だったな。さて……

道がわからんぞ

### 3 P u k e ! P u k e ! (後書き)

感想、意見、お待ちしています

## 4 日常（前書き）

前回までのあらすじ

ジム君は方向感覚に乏しいようです。

## 4 日常

部室のドアを開いた。誰もいない。澁と律は掃除当番だしな。

やっぱり俺1人か……。

俺はいつもの席に腰を下ろしiPodとマジックペンを取り出した。ヘッドホンを装着し再生ボタンを押した。重低音が脳を揺さぶる。実際に揺さぶってるわけじゃないが。

今でも時々やる。適当なサウンドをひたすらリピートで聴きそのリズムに合う即興でリック（叙情詩）を書く。ライム（韻）も重要だがいかに自分の世界を表現するか、それに掛かっている。もっとも、日本じゃ理解出来る奴なんかあまりいないだろうが。

「また手の平に書いてるの？」

「Wha!？」

だが軽音部に入部してからと言うもの必ず邪魔が入る。特に律とか唯とかから。今回は律だ。どうやら掃除が終わったらしい。

「紙使いなよ。で？いい詩出来た？」

「ぜんぜん」

「な〜んだ。いいのできたら軽音部で唄って貰おうと思ったのに」  
仮にリックが理解出来る奴がいたとしてそんな事してみる。間違はなく軽音部は廃部だぞ。俺が書いているのは某將軍様や某大統領を皮肉った詩だ。放送禁止用語たっぷりで修正いれたらサウンドが成り立たなくなってしまう。

「それはヤだな……」

「だろ？」

「やっと終わったよ〜」



掃除当番だった澁が現れたのでiPodの電源を切り立ち上がる。

「澁、ちよつと付き合っただけいいんだが」

「ふえっ!？」

え?なんでびっくりする?

「ベースの練習……」

「え?あ……ああ……。ベースの練習ね。いいぞ」

?ベースの練習以外なんかあるのか?まあいいや。とりあえずベースを取り出し適当に弾いてみせる。……どうだ!?

「なかなかいいんじゃない?あとは細かいテクニクとかを覚えればいいよ」

おお!なかなか好評!毎日練習しまくった甲斐があるぜ!

「しかしこの短期間でここまで出来るようになるとは……。才能あるんじゃないか?」

「そうだな……」

律の意見に澁が同調する。もつと褒めるがよい。

「まあお前のおかげ……」

といい澁の肩に手を置こうとした。

パン

え……?

こ……この俺が見切れなかっただお!?

てのは冗談で澁に手を弾かれた。

「ご、ごめん……。びっくりしてつい……」

結構シヨックなんだが……。まさにorz。

「あ……。澁男の人苦手なんだよな。気にしないでやって」

「別に苦手ってわけじゃ……」

「What!？」

なんだと！？もしや男に心に深い傷を付けられたとか！？だとしたらドメスティックなヴァイオレンスか！？はたまた痴漢！？

「ちつちか…！？」

野郎ぶつ殺してやる！血祭りだ！見つけ出してアメリカに連れ帰ってアレに45口径弾ぶち込んでやる！ケツの穴にニワトリ（Chicken）ぶち込んで棺桶（Coffin）に入れて日本（Japan）に送り返してy（ry

an）に落ち着け！」

「ジム、キャラ崩壊してないか？」

「ごめ〜ん。掃除なかなか終わらなくて……」

「ごめんなさい！掃除が……」

多分2人は暴れそうな俺を制止している律と漣を見ただろう。

「「まずかった……？」」

「ぜんぜん。」

「皆さんお茶はいましたよ」

細から紅茶を受け取る。今日は紅茶にしてみた。

「それにしても漣、なんで苦手なんだ？」

紳士としてこんな地雷質問はしたくないんだがやはり好奇心には勝てない。

「え？え……と……」

もじもじとする漣。そうだよな。やっぱり言いたくないよな。

「悪い。変な質問して、忘れてくれ」

「い、いや、違うんだ。ただ、あまり男の子と接する機会がなかったから……なれてなくて……」

なるほど。

「……」

やべ、なんか変な空気……。なんか言わねえと。

「あつ！そうそう！」

唯が何か思い出したようだ。ナイス！

「昨日ありがとうね！憂を助けて家まで送ってくれて！」

……。一気に話が飛躍したがまあいいか……。

「なにになに？なににしたの！？」

律がニヤニヤと俺を肘で小突く。

「チンピラに絡まれてたから……。」

ゲロぶっかけた……。なんて言えるわけがない。

「おおー！ありきたりな恋愛フラグ！」

「なわけないだろ。てか騒ぐな」

そもそもきっかけのチンピラ撃退法がゲロってどういいう話だよ。…

…ん？

「……………」

漣が上の空なのかなんなのかはわからないが一点を見つめたまま動かない。

「漣……………」

目の前で手を振る。

「ふえっ！？」

なんだこの間抜けな声。漣らしくないな。

「どうした？ボケっとして？」

「ああ、別になんでもない。ただ考え事してただけだ」

「ふーん……。ならいいや、てつきり熱でもあるのかと」

俺はそう言ってから紅茶を口にした。

Side:漣

ジムは言っでは悪いけど陰険そうな顔付き、おまけに全く笑わない。

笑ったとしても薄ら笑いだけ。垂れ気味の切れ目からは温かみが微塵も感じられず第一印象は”怖そう”だった。それが災いして誰も彼に寄り付かない。彼は友達が少ない。

でも紳士的でもある。私達がお茶をするときはさり気なく椅子を引き、部室に出入りする時は扉を開き私達が出るまで押さえ続け最後に自分が出る。また帰り道では必ず車道側を歩いている。今がそうだ。私は唯とムギと別れ律とジムの3人と歩いている。

「なんだ？人の横顔ジロジロ見て？惚れたか？」

「なっ！？なわけないだろ！」

「ハイハイ」

時々ムカつくジョークも言うようになった。この余裕そうなりアクシヨンが更にムカつく。でも

私にとってはじめての異性の友達だから大切にしたいな。

## 4 日常（後書き）

感想、意見

お待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7684x/>

---

けいおん！ Love The Way You Music

2011年11月16日21時25分発行